
闇と生きる少年

菖蒲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇と生きる少年

【Nコード】

N5698A

【作者名】

菖蒲

【あらすじ】

幼い頃に両親を失い、親類にも見捨てられた少年『霞創夜』。そのせいで、彼は長いこといじめにあってきた。そして中学卒業の日、彼は誰かに突き飛ばされ、トラックに轢かれてしまう。次に目を開けたとき、彼は、知らない家のベッドに寝かされていた。なんだか良くわからないノリで送る、異世界召喚ファンタジー。

ブローグ

突然だが自己紹介する。俺の名前は霞創夜^{かすみそらや}、しがない中学三年生だ。

両親は二人ともいない。

お袋は俺が六歳のときに死んだし、親父は七歳のときに失踪した。当然俺は親戚に預けられる事になるんだが、どういう訳だか、俺の親戚は誰一人としていない事になってた。

いや、理由ならわかってる。俺のお袋はいいトコの娘だったらしく（しかも長女）、庶民の親父との結婚は認められなかったらしい。それでお袋は家を捨てて、駆け落ち同然で親父と結婚したわけだが、お袋がいいトコの娘だという事実には変わり無く、当然、遺産の相続権は俺にも有るわけだ。

要するに金の問題だ。駆け落ち同然で家を出た奴の息子とは言え、一応遺産の相続権はある。そんな奴を引き取りなんかしてみろ、そいつにも遺産の取り分がいくわけだ。

まあ家の親戚どもに取っちゃあ面白くなかったんだろうな。結局、俺は天涯孤独の身となって、施設に預けられる事になった。

それはどうでも良い。はつきりいつてあそこで引き取られてても遺産相続のドロドロした争いに巻き込まれてただろう。

そんなのは真っ平ゴメンだ。

問題なのはその後の生活で俺に向けられてくる“眼”だった。

“可愛そうな子” “捨てられた子”

どいつもこいつもそういう眼で見てくる。好奇の中に少量の同情を込めた眼。

うつとおしいったらない。別に俺はその事に対して何とも思っちゃいないのに、周りは好き勝手騒ぎ立てる。

その上面倒な事に、学校のクラスメイトにその事を知った奴がいた。中学生といってもまだまだガキだ。

「あいつ親いないんだぜ」「親戚にも見捨てられたんだぜ」

調子に乗って好き勝手騒ぎ立てる。だが、俺は別にその事に対して何も言わなかった。

そいつの言ってることは事実だし、別に親がいなかるうが親戚に見捨てられようがどうでも良かったからだ。

するとそれが気に入らなかつたらしく、今度はクラス全体を巻き込んで俺にちよっかいを出してきた。

無視は当たり前。

机の捨てられる、水をかけられる、教科書・靴を盗まれる、足をかけられる、集団でリンチをかける、などなど、まあ色んな事をされた。

俗に言う“いじめ”というやつだ。

だが、俺も黙ってそれに甘んじていたわけではない。

机を捨てられれば別の場所から持ってきたし、水をかけられそうになれば避けた。教科書・靴は自分で常に持っていた。

足をかけられそうになれば、その足を思いつき蹴ってやったし、リンチは人数が集まる前に潰して逃げた。

“いじめ”を先導している奴と、運悪く二年間同じクラスになったもんだから、これが二年間続いた。

毎日毎日周日から浴びせられる敵意、嫌悪。お蔭でそういう負の感情に異常に敏感になってしまった。

だが、そんな生活も今日で終る。今日は中学の卒業式。今日さえ終れば、暫くは平穏な日常が戻ってくるはず……だった。

しかし、どうやら俺は、どうやっても平穏な日常というやつを手に入れることは出来ないらしい。

卒業式が終って校門を出たときだった。迂闊にも、周りへの警戒を緩めていたらしい。

突然、後ろから車道へ突き飛ばされて、走ってきたトラックに撥ね飛ばされて、俺は意識を失った。

第一話「滅びの使者」

「……どこだ、ここ」

目を覚ましたら、見知らぬ部屋のベッドに寝かされていた。確か俺はトラックに撥ねられたはずなんだが、なぜか外傷は見当たらない。それどころか……

「身体が……軽い」

そう、身体が異様に軽い。まるで自分の身体の重みを感じない。どこか浮いているような感覚がある。

「おお、起きなさったか。大丈夫かね？」

自分の身体の異変に戸惑っていると、部屋のドアが開いて、老人がひとり入ってきた。

優しそうな老人だ。少なくとも俺に対して敵意や害意はない。

「大丈夫かね？ 気絶しとったようだが……」

ベッドの横に置いてあった椅子に座り、心配そうに聞いてくる。

「ええ、大丈夫です。あの、ここは？」

「ん？ ここは私の家じゃよ。たまたま君が村の近くで倒れとったんのお、運んできたんじゃない」

「そうですか、ありがとうございます」

そう言ってふと気付く。一体何年ぶりだろうか、「ありがとう」なんて言ったのは。

使う場面に恵まれなかったせいで（半分自分で放棄していたが）長いこと忘れていた言葉だ。

「いやいや、構わんよ。しばらくゆっくりしていきなさい」

「すみません、ご迷惑をおかけしたようで」

「構わんよ、このくらい。ところで……君はこの国の人かね？」

見慣れん服を着ているようだが

「は？」

一瞬意味がわからなかった。どこの国って、ここは日本じゃないのか？

それに見慣れない服って……こんな制服ぐらいどこにでもあるだろ？

「え、と、日本ですが」

「ニホン？ どこかねそれは、聞いた事の無い地名だが」

俺は、自分の耳を疑った。日本がわからないって、すっかり日本語で会話しているんだが。

「あの、ここは日本じゃないんですか？」

「何を言っとなるんだ？ ここはカス力村じゃよ」

どこだよ、それ。少なくとも俺の頭の中には、そんな地名はない。だが、この老人が嘘をついているようには見えない。少なくとも、ここは日本ではないようだ。

「……カスカ村って、どこの国なんですか？」
「サン・ド・クルス王国じゃが」

そんな名前の国は無いはずだが……。いや、俺が知らないだけかもしれない、聞いてみよう。

「それって、何大陸にあるんですか？」

「何を言っとるんだねさつきから。アルテリア大陸に決まっているだろう」

決定的だった。地球上にそんな大陸は存在しない。となると、導き出される結論は一つ。

「異世界……なのか」

認めたくは無い、余りに非現実的な事だ。しかし……

「どうかしたのかね？ 気分が悪そうだが」

俯いて考えているのを、気分が悪くなったと勘違いしたらしい。心配そうに聞いてくる。

「あ、いえ、大丈夫です」

「ふむ、そうかね。無理しなさんなよ」
「ええ」

さて、どうするか。何かしようにもこの世界の事を知らないし、頭も混乱してる。

この老人に話してみるか。悪い人じゃ無さそうだし、力になってくれるかもしれない。

「お爺さん、実は……」

俺は、目の前にいる老人に異世界から来たのかもしれない話を話した。

「……！」

一瞬、強烈な敵意……いや、殺気を感じた。老人は笑顔のままだが、間違いなく、先程の殺気はこの老人の物だ。

「……そうかね。わかった、協力しよう。少し待っていたまえ」

そう言い残すと、その老人は部屋を出て行った。部屋が静寂に包まれる。

それにしても、先程の老人の様子は明らかにおかしかった。一体どうしたんだ？

十分後、再び、今度は大量の殺気を感じた。明らかに様子がおかしい、老人も返ってこない。

恐らく、殺気の対象は俺だろう。理由はわからんが、どうやらやばそうだ。

幸い、部屋には窓があった。ここは一階のようだし、ここは逃げよう。

俺は、ベッドから這い出ると、窓から部屋を抜け出した。

「……しまった！ 滅びの使者が逃げ出したぞ！」

窓から出た後直、部屋の中からそんな声が聞こえてきた。

滅びの使者って……俺のことか、やっぱり。

「いたぞ、窓から逃げやがった!」

窓から顔を出した男に見つかってしまった。相当殺氣立っているようだ。

しかし、幸い距離が離れていたので、何とか逃げられたようだ。追っ手の姿は見えない。

それにしても、身体が軽い。さっきだって、いつもよりもずっと速く走れた。一体どうなってるんだ?

「来たぞ! 殺せ! 奴は滅びの使者だ!」

くそ、待ち伏せか。村の出口のような場所まで来ると、数人の男たちが待ち構えてきた。

全員、桑などの凶器を持って向かってくる。しかも後ろからは追っ手が迫ってきた。

「くそ、挟み撃ちか」

どうする? 後ろは数が多い、前は凶器持ちだが数は少ない。それに門があるのは前だ。ここは……

「正面突破だ」

俺は、門に向かって走り出した。目前に凶器を持った男たちが迫る。

「喰らえ、悪魔め!」

男たちの内のひとりが、桑を振り下ろしてきた。何の躊躇も無い、本当に殺す気のようにだ。

「このお！」

だが、俺もまだ死ぬ気は無い。振り下ろされた桑を受け止めようと、手を出した……その時だった。

バキッという音がしたかと思うと、俺が掴んだ桑は、木の枝か何かのように簡単に折れてしまった。

何なんだ、今は。俺はただ握っただけなんだが。

「ひ、ひいい、化け物だ」

桑を振り下ろしてきた男が腰を抜かしながらそう言う。化け物……か。

この間までただの中学生だったんだが。

「くそ、滅びの使者め」

近くにいた男が叫ぶ。滅びの使者って一体何なんだ？

その男を問いたださそうとしたが、後ろから追っ手が迫ってきたため、そのまま門を潜って外に出た。

「ハア、ハア、ハア」

どのくらい走っただろうか、村を出た後も、暫く村人たちは追ってきた。

しかし、なぜかいつもよりも速く走れたお蔭で、追っ手は直に振り切れたのだが、何となくそのまま走り続けた。

今は草原のど真ん中にいる。

「ハア、ハア……ふう。それにしても、一体滅びの使者って何なんだ？」

「フフ、教えてあげましょうか？」

振り返ると、そこには角と翼の生えた女が、微笑みながら立っていた。

何だ、この女は？

第二話「変な女」

今、俺の前には妙な女が立っている。角と翼が生えてる美女だ。いや、別に角とか翼は問題じゃない。異世界だしそんなのもいるだろう。

問題は、何故にこの女が白衣と眼鏡を身に付けているのかという事だ（ちなみにクリップボードも持ってる）。

「コメントに困るんだが……」

なんとか言葉に出せたのはこのくらいだった。どこからどう突っ込んで良いのかさっぱりわからない。

「あら、気に入らないかしら？」 『美人保険医〜イケナイ放課後〜』
って感じに決めてみたんだけど

「決める方向が間違っている。ていうか異世界に何故保険医とか放課後とかいう言葉がある？」

「そこは気にしちゃいけないわ」

いや、大いに気にすべき所だろう。何故にどこぞのAVのような言葉が異世界に出てくるのか、理解に苦しむ。

その前にこの女は何がしたいんだ？

「アンタ、一体何が目的だ？ 俺を殺そうとするってんなら帰ってくれ」

「やあねえ、そんな事する訳無いでしょ。それにアンタじゃなくてルーシェよ。ちなみにスリーサイズは上から……」

「いい、言わなくて」

「まあ、恥ずかしがっちゃって。ウブねえ」

ホントに訳のわからん女だ。それに、妙にノリが軽い。狙っているのか、それともこれが地か？

……恐らく地だろう。

「で、そのルーシェさんが俺に何の用だ？」

「だからあ、あなたにこの世界の事を教えてあげるって、さっきから言ってるじゃない」

「ほお、それは是非教えてもらいたいものだが、その前に一つ、聞きたいことがある」

「ん？ 何かしら？ あ、言うておくけど私の好みはあなたみたいな子よ」

「そんな事は知らん！」

「あら、つれないわねえ」

何がしたいんだコイツは。ホント、調子が狂う。

「アンタはなんで俺がこの世界の人間じゃないと解ったんだ？」

「アンタじゃなくてルーシェだつて言ってるのに……」

「どうでも良いからさっさと答えろ」

「ハイハイ、理由は簡単よ。あなたが滅びの使者って呼ばれていたから」

コイツ、俺とあの村人たちのやり取りを見てたのか。そういえばなんで俺襲われたんだろう。それに……

「その滅びの使者ってなんだ？」

「あら、良い質問するわね。滅びの使者って言うのはその名の通り、この世界に滅びをもたらす者のことよ」

「それが俺とどう関係があるんだ？」

「十年も前の話なんだけど、あなたと同じように異界からやって来た人間がいたの。」

その人は女だったけど物凄く強くてね、当時魔族と戦争をしていた人間達は勇者だと言って囃し立てたわ。

でもその女性は、何を思ったのか魔族の側についた。

そしてその翌年、それまで行方不明だった魔王の息子と結婚したの。

その後、戦争自体は魔族の突然の撤退で収まったけど、人間は甚大な被害を受けたわ。

それから、この世界では異界から来た人間は世界を滅ぼすといわれているの」

なるほど、それで『異世界から来た奴は滅びの使者』と言われている訳だ。

それで俺は襲われたと。

「理不尽だな。別に俺はそんな奴とは何の関係も無いし、強いわけでもない」

「実はそうでもないんだけどね。ま、それはそれとして、他に質問は？」

「なんだよ、何かあるのか？」

「別に今はわからなくても良いわ。直にわかるから。それより他に質問は？」

なんか強引に話を切られた感があるが、まあ良いだろう。他の質問か……とりあえず、

「魔族って何だ？」

「はい、『魔族って何だ？』入りましたあ」

「寿司屋か！」という突っ込みを辛うじて押しとどめる。ホントに妙な女だ。

「えーと、魔族って言うのは、魔界に住む種族なのね。

人間よりも魔力が高く、膂力も強い。おまけに知能も高い。まあ人間に取っちゃあ天敵みたいなものよ」

「ほお、で、お前も魔族なのか」

「正解！ ご褒美にチュウしてあげるわ
いらん」

近づけてきた顔を手で押しのける。悪いが俺には好きでもない奴にキスされて喜ぶ趣味はない。

「ひ、ひどい、そんな露骨に嫌そうな顔しなくったって」

「やかましい」

地面にのの字を書きながら言ってきた言葉を、一言で切り捨てる。

「ま、良いわ。他は何かある？」

ホントに、変な女だ。コロツと表情を変えて立ち上がったその女を見て、俺はしみじみとそう思った。

「無いようね。それじゃあちょっと付き合ってもらうわ。会わせたい人達がいるのよね」

「て、おい、ちょっと待て。誰に会わせようって？」

「元祖異界から来た人間と、その旦那様」

目の前の女は、いきなりそう言うと、俺の手を掴んだ。そして次

の瞬間には、先程の草原と違う場所に来ていた。

「な、何だ？　どうなってる」

「フフ、驚いちゃって、可愛い。時空転移をただけよ」

「時空転移？」

「簡単に言えば瞬間移動ね。今いる場所から別の場所まで一瞬で行けるの」

瞬間移動ね……さすが異世界、何でもありだ。

しかし、どうも展開が早すぎる。いきなりこの女が俺の前に現れた事といい、作的なものを感じるんだが……。

「さて、行くわよ」

「行くって、どこにだ？」

「さっきも言ったでしょ、あなたの先輩とその旦那様の所よ」

「なんで俺がその二人に会う必要がある」

「行けば解るわよ」

ホントに、勝手な女だ。逆らえない俺も俺なんだが……。

まあ良い。俺より先にここに来た人にも興味があるし、それに……

……どのみち帰りかたも解らん。

半ば開き直って女について行くことにしたが、その開き直りを後から後悔する事になるとは夢にも思わなかった。

「なんで……アンタたちがここに……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5698a/>

闇と生きる少年

2010年10月10日05時31分発行